

2 神と神々

ギルガメッシュは目をおかずに言峰の私室にあらわれるようになった。大抵は夜、言峰が休むために部屋に入るとギルガメッシュがひとりソファに陣取って葡萄酒をあけている。聖杯戦争などどうでもいいような顔をして、事実どうでもいいのだろう、勝手気ままに話を進め、やおら話を中断して帰っていく。

そして今、ドアを開けた言峰の前には、ソファに横たわって眠るギルガメッシュがいる。葡萄酒を飲んでいるうちに眠ってしまったのだろう、足をあげ、片手を背にかけたまま、目を瞑^{つぶ}っていた。

ソファの脇に立ち止まると深い静寂がやってくる。照明に満たされていても、部屋の隅や家具の影に染みついた夜が、すべての音を呑みこんでいくかのようだ。

最初は自分をからかうためにふざけているのかと思った。しかし言峰が近づいていって倒れていたグラスを元に戻しても起きあがってはこない。広がった金色の髪に照明が落ちかかり、砂金のような輝きを放っている。瞼を閉じて音もなく眠る姿は、最古の王と呼ばれ、最強と謳^{うた}われた

サーヴァントには到底見えない。

サーヴァントも眠るのかと言峰は思う。気ままな態度や鎧姿を見慣れていたから、こうして人間らしい行いをとられるほうが意外に感じた。それを言うなら、もともと神話内の人物だったという時点で自分たちとはかけ離れた存在だ。ギルガメッシュ、神の威光と人の知恵を繋いだ、半神半人の英雄王。遠い神話が、自分の目の前に青年の姿となつて眠っている。

言峰は暇を見て文献を当たり、ギルガメッシュの軌跡を辿った。暴君としての姿、女神との確執、唯一無二の友人の喪失と不老不死の伝説。神話として紡がれたそれらはどれも真実味のない出来事だが、実際に目にしてしまつてからでは真剣に向きあわざるを得ない。つまりはこのおとぎ話にも見える埒外^{らちがい}さが、ギルガメッシュの身に途方もない威光と力を編みあげているのだ。半身は神でありながら神を嫌い、不老不死を求める途上で途絶えてしまった無念。本人に言えば一笑に付されるだろうが、サーヴァントの役目を忘れたようにこの世界を闊歩している理由もわからない。

眠りこまれるぶんには別段構わないが、ずっとこのまま